

## 研究主題 「体の基本的な動きを身に付ける指導の工夫

### - 学びの連続性を踏まえた低・中学年の体づくり運動 - 」

東京都教職員研修センター企画部企画課  
世田谷区立松丘小学校 教諭 高木 孝輔

#### 第1 研究のねらい

中央教育審議会答申（平成20年1月）では、改善の具体的事項（小学校：体育）の中で、体力の向上を重視し、「体づくり運動」の一層の充実を図ることが述べられている。低・中学年では、発達の段階を踏まえ、体の基本的な動きを身に付けることをねらいとしている。児童に体の基本的な動きを身に付けさせるためには、児童がめあてをもって運動に取り組めるように、指導のねらいを明確にして指導することが重要であると考え。しかし、教師が指導する際に必ずしも指導のねらいを明確にしていなかったこと、児童の学びが積み上がらないこと等の課題が見られた。そこで、幼児と児童の発達や学びの連続性を踏まえて指導すれば、第1学年から学びを積み上げ、児童がめあてをもって運動に取り組めるようになり、体の基本的な動きが身に付くと考えた。本研究では、学びの連続性を踏まえ、就学前の幼児の実態や援助の仕方に基づいた低・中学年の体づくり運動における指導の手だての開発を研究のねらいとした。

#### 第2 研究の内容と方法

##### 1 研究仮説

就学前の援助のポイントを踏まえ、低・中学年の「多様な動きをつくる運動（遊び）」において、具体的な言葉かけを効果的に取り入れ、魅力ある活動の場で、資料を活用するなどの指導を工夫して行えば、児童はめあてをもって運動に楽しく取り組むようになり、体の基本的な動きが身に付くだろう。

##### 2 基礎研究

##### (1) 学びの連続性について

就学前教育カリキュラム（平成23年3月東京都教育庁指導部義務教育特別支援教育指導課）に示された就学前の援助のポイントを基に、指導のポイントの分析を行った（表1）。

表1 指導のポイント

就学前の援助のポイント	低・中学年の指導のポイント
ア 運動用具の使い方や遊び方を発見したり、考えたりする楽しさを味わい、自分達で取り組んだ充実感を味わえるようにする。	ア 動きのコツを発見したり、動きを多様に工夫したりする楽しさを味わい、充実感を味わえるようにする。
イ 「やってみたい」と思えるような場で、自分の力を十分に発揮できるようにする。	イ 「やってみたい」と思えるような場で、創意工夫したことを十分に発揮できるようにする。
ウ 挑戦しようとする気持ちを受け止め、目的を明確にもてるようにする。	ウ 活動の見通しをもたせ、目的を明確にもって運動に挑戦できるようにする。

その結果、就学前と小学校における援助や指導のポイントの共通点が明確になり、これらについて学びの連続性を踏まえた指導ができると考えた。

##### (2) 「体の基本的な動きを身に付ける」二つの側面での捉え方について

本研究では、「体の基本的な動きを身に付けること」に関して、二つの側面で捉えている（表2）。一つは、動きのレパートリーを増やすこと、つまり「動きの多様化（量的な獲得）」である。もう一つは、動きの質を高め、組み合わせた動きを身に付けること、つまり「動きの洗練化（質的な獲得）」である。

表2 体の基本的な動きを身に付ける2つの側面

低 学 年	<b>「動きの多様化」(量的な獲得)</b>
	・ 多様な動きを経験することによって、動きのレパートリー(種類)を増やしていくこと。
中 学 年	<b>「動きの多様化+洗練化」(質的な獲得)</b>
	・ 一つ一つの基本的な動きを何度か経験することによって無駄な動作を少なくし、動きの質を高めていくこと。 ・ それらの動きを組み合わせた動きを身に付けること。

### (3) 基礎研究の考察

就学前の援助や低・中学年の指導のポイントについて、文献等で基礎研究を行ったことで、学びの連続性を踏まえた指導ができることが分かった。また、「まるわかりハンドブック」(平成23年7月文部科学省)東京都小学校体育研究会及び地区小学校体育研究会の優れた実践等、先行研究を行ったことで指導のねらいを明確にすることができた。

### 3 調査研究

平成23年7月に都内公立小学校13校及び公立幼稚園9校の教員220名(小学校低学年65名、幼稚園37名)を対象に意識調査を実施した。

#### (1) 子供(4歳～12歳)の動き等の課題に関する意識

幼稚園と低学年の教員は、共通して「投げる」ことを課題と捉えている。特に「片手で投げる」ことを課題と捉えている教員の割合は、低学年では80%、幼稚園では70%であった(図1)。

#### (2) 子供の動き等の課題を踏まえた指導上の課題に関する意識

低学年の教員は78%、幼稚園の教員は70%、「言葉かけの工夫」を意識して行っている。「めあてのもたせ方」については、幼稚園・小学校低学年の教員はともに、「言葉かけの工夫」に比べて課題意識が低い傾向にある(図2)。

#### (3) 調査結果の考察

幼稚園及び小学校教員の意識調査の結果から、とりわけ「投げる」動きの指導、具体的な言葉かけ及び幼児や児童にめあてをもたせるための工夫が、共通した課題であることが分かった。幼児や児童の発達や学びの連続性を踏まえた指導の手だてを工夫することにより、こうした課題を解決しやすくなると考えた。

### 4 開発研究

基礎研究及び調査研究を踏まえ、児童がめあてを明確にもって運動に取り組めるようにすることを重視した、体の基本的な動きを身に付けるための指導の手だてを開発した。

#### (1) 学びの連続性を踏まえた三つの手だて

本研究では課題を基に、児童にめあてを明確にもたせるための手だてとして、「具体的な言葉かけ」「魅力ある活動の場」「資料の活用」を考えた。児童に「やってみたい」という思いをもたせるために、具体的な言葉かけを行い、魅力ある活動の場を設定する。そして、児童にめあてを明確にもたせるために資料を活用する。これらの手だてを行うことで、児童はめあてをもって運動に取り組むようになり、体の基本的な動きが身に付くと考えた(図3)。

#### ア 具体的な言葉かけ

体育科の評価の観点を踏まえ、言葉かけの種類を表3に示すように三つに分類することで、ねらいに即した言葉かけができるようにした。低学年では易しい動きを変化させ、動

図1 動き等の課題に関する調査結果

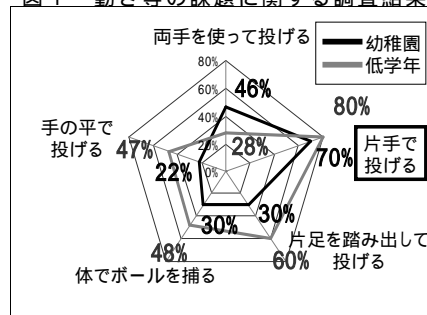


図2 指導上の課題に関する調査結果

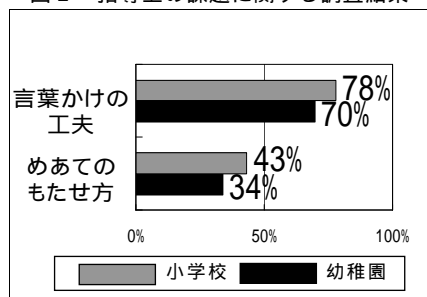
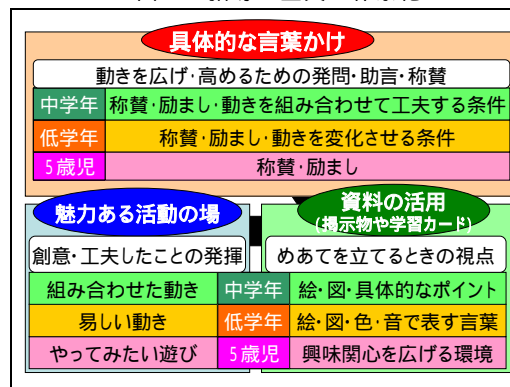


図3 指導の工夫の体系化



きを多様化するための、中学年では動きを組み合わせる動きの質を高め、動きを洗練化させるための具体的な言葉かけを取り入れて指導する。

表3 言葉かけの分類

運動	動きを変化させるポイント（多様化・洗練化）等を示す言葉かけ
態度	児童の意欲を高めたり、充実感・満足感を味わえるようにしたりする称賛・励ましなどの言葉かけ
思考・判断	友達の動きや自分の動きをフィードバックさせたり、コツを考えさせたりすることで運動の目的を明確にする言葉かけ

### イ 魅力ある活動の場

児童が「やってみたい」「楽しそう」と感じるような魅力ある活動の場を設定し、意欲的に活動できるようにする。また、低学年では易しい動きを、中学年では組み合わせた動きを工夫することができるように活動の場を設定する（図4）。

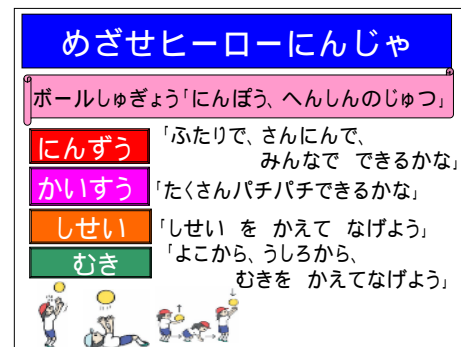


図4 場の設定例

### ウ めあてを明確にもたせるための資料の活用

児童がめあてを選んだり考えたり、学習を振り返ったりすることができるようなワークシートを活用する。また、「人数」「回数」「姿勢」「方向」等、動きを多様化させる条件や、「しながら～する」等、動きを組み合わせたり、動きの質を高めたりするためのポイントを示した掲示物を活用する（図5）。

図5 第1学年の掲示物例



## 5 検証授業

### (1) 検証授業の概要

開発した三つの手だてを学習指導案に位置付け、都内公立小学校第1学年7時間、第3学年6時間「多様な動きをつくる運動（遊び）」の授業を実施し、ビデオによる分析、ワークシートの記述、単元終了時の意識調査の結果から三つの手だての有効性について検証した。

### (2) 三つの手だてを取り入れた学習指導

第1学年授業の前半では、魅力ある活動の場として、じゃんけんすごろくを行った。体じゃんけんの場では、「様々な姿勢で移動しよう」等、共通のめあてをもたせて、「ケンケン・トントン」等の音を表す言葉かけや、「ササッ」「グッ」等、動きのイメージを言語化した具体的な言葉かけを多く取り入れた指導を行った。また、各コーナーに掲示物（資料）を設置し、動きのポイントを確認できるようにした。授業展開の後半では、ボールや輪を使って伸び伸びと運動し、友達と関わりながら取り組める活動の場を設定し、各自がめあてをもって取り組むようにした。動きを変化させるポイント（資料）を掲示し、「フワッと投げよう」「二人で同時に投げよう」等の具体的な言葉かけを中心に行い、児童が創意・工夫したことを発揮しやすくした。

### (3) 検証授業の分析と考察

#### ア 授業における観察及びビデオ分析による第1学年A児の動きの変容

表4では、観察から第1学年A児の動きの変容を分析した。教師の言葉かけによってボールを投げるタイミングをつかんだり、友達と関わりながら動きを工夫したりする中で、体の動かし方には多様な方法があることを知り、新しい動きを身に付けることができた。

表4 A児の動きの変容と手だて

第1学年	第1時	第2時	第3時	第4時	第5時	第6時	第7時
A児		【第2時】ボールを投げるタイミングが分からない。投げ上げる位置をイメージできない。	【第3時】「せえの」とグループで声を合わせることでタイミングよくボールを「フワッ」と投げ上げ、両手で捕ることができるようになった。				【第7時】3人で同時に輪を回し、隣の友達の輪を捕ることができた。3人で同時に転がして捕る等、仲良く繰り返し取り組んでいた。
手だて ア 言葉かけ イ 活動の場 ウ 資料活用		ア「声でタイミングを合わせ、全員が捕れる高さにフワッと投げてみよう。」 ウ「人数を増やす」「フワッ・キャッチ」等のヒントカードを見て動きを工夫できるようにした。					ア「3人でやってみよう。『せえの』、で回して隣の友達の輪を捕れるかな。」 イ 同じめあての児童が友達と一緒に運動に取り組めるように活動の場を設定した。

### イ ワークシートの記述の変容

第4時から単元の最後にかけて、児童が教師の言葉かけや掲示した資料に示した言葉を記述しているワークシートを分析した。教師の言葉かけや資料を活用した児童の割合が、第1学年では、25%から68%、第3学年では、56%から82%に増加した。このことから資料を活用したことで、「フワッ・キャッチができた」等、めあてとする動きを具体的な記述で表現し、運動に取り組める児童が増えた(図6)。

図6 ワークシート記述の変容

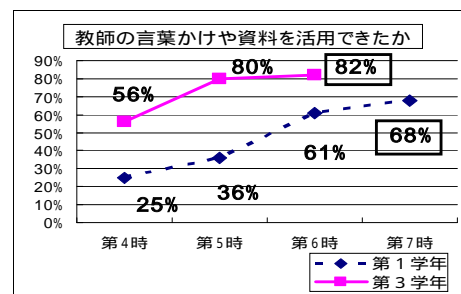
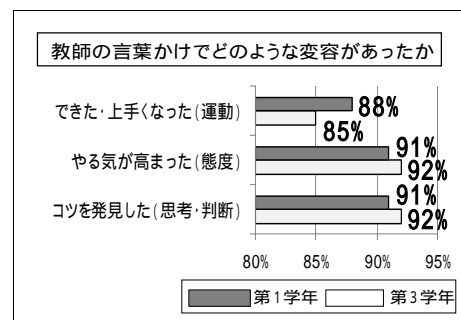


図7 言葉かけに関する意識(単元終了時児童の意識)

### ウ 単元終了時の意識調査の結果

単元終了時に、教師の言葉かけに関する児童の意識について聞き取り調査をした。

第1学年では88%、第3学年では85%以上の児童が教師の言葉かけによって「できた」「上手くなった」と捉えていた。また、91%以上の児童が運動への意欲を高め、教師や友達との良好な関わりの中で動きのコツを発見し、「できた」という達成感を実感できたと考える(図7)。



## 第3 研究の成果

- 第1学年では、投げ上げたボールを捕る、拍手して捕る、寝た姿勢で捕る、3人で息を合わせて捕る等、投げる・捕るといった動きの種類を二つ以上増やした児童が34人中34人、四つ以上増やした児童が30人見られる等、動きのレパートリーを増やすことができた。
- 第3学年では、学級児童39人中36人が、ボールを投げ上げるタイミングがスムーズになり、投げ上げたボールを移動して捕る等、動きの質を高めることができた。
- 学習カードに第1学年、第3学年の全ての児童が、運動に楽しく取り組むことができた」と記入していた。具体的な言葉かけ、魅力ある活動の場、資料の活用という三つの手だては有効であった。

## 第4 今後の課題

- 評価の観点に即した具体的な言葉かけや、活動の場を効率的に準備する方法、児童の実態に応じた資料提示の仕方の工夫等、三つの手だてを更に改善する。
- 第2学年、第4学年及び第5・6学年で体づくり運動における指導の工夫を検証し、就学前から小学校6年間の学びの連続性を踏まえた系統的な指導ができるようにする。